



挑戦の夏・世界のアーティストとの共演

—第1回サマーコンサート、アフィニス 夏の音楽祭2011—

広島なぎさ中学校・高等学校
教諭 藤原 譲治

オーケストラ・今年度の活動方針

本校には吹奏楽部、室内楽部があり、それぞれが独自の活動をしてきたが、近年は二つの部が融合した形の、オーケストラとしての活動を活発に行っている。

吹奏楽、弦楽合奏に特有の楽器もあり、様々な形態(ポップス・オーケストラというべき形も含め)での演奏活動を広く柔軟に行ってきたが、オーケストラとしての実力を高め、より深い音楽的表現を求めていきたいと考え、今年度からはこれまでに以上に、伝統的なオーケストラの編成での活動に主軸を置くこととした。

吹奏楽コンクール不参加。そして…

昨年度までは、本校吹奏楽部も夏に行われる吹奏楽コンクールに毎年参加してきたが、ここ数年参加することについて疑問を感じるが多々あった。

例えば、編成上の問題である。夏には高校3年生は引退しており、すでにいない。また中高一貫教育の性格上、高校生と中学生併せて一つの楽団をつくっているため、毎年40名前後の部員のうち半数以上が中学生という体力的に不利な状態で高校部門に参加していた。

またコンクールで求められる音づくりと本校が求める音楽の違いを感じるようになってきていた。

そんな中、昨年の夏に続き、この夏も様々なアーティストから共演のオファーやそのチャンスが重なった。

コンクールのために時間を費やすより、世界で活躍するアーティストと共演し、そこから広がっていく世界を体験する方が生徒たちにとって得るものが大きいのではないかと…。

生徒たちは議論を重ね、特に吹奏楽部の生徒は何度も議論を重ねた結果、今年はコンクールに参加せず、サマーコンサートを開催することとなった。

こうして世界で活躍するアーティストたちとふれあい、共演することにより、技術だけでなく、心と感性、感覚を磨く夏が始まることとなった。

第1回サマーコンサートに向けて

このコンサートのコンセプトは「新しいことに挑戦する」「本物に触れ、感性を磨き、それを発信する」ということである。

今回は昨年に引き続きシャランゴ奏者で作曲も手がけるディエゴ・ヤスカレーヴィチ氏、そして現代音楽で、特にミニマル音楽の世界的権威、ウリ・ゲッテ氏、海外で研鑽を積み、積極的に演奏活動をされているギター奏者、上垣内寿光氏との共演が決まった。

コンサートは8月3日。本番に向けて7月26日から8月1日まで、3人のアーティストたちとのリハーサルが行われた。

この一週間は生徒にとっても私にとっても非常に濃厚な時間であった。

ディエゴ氏の即興表現を用いた作曲、演奏技法は本校の音楽科が柱としている創造的音楽学習と重なる部分が多い。

生徒たちは敏感に反応し、ディエゴ氏の指揮から彼の発する音楽を読みとり、見事に音に変えていった。

ウリ氏の指導により体験する初めてのミニマル・ミュージックも生徒にとって非常に刺激的であった。簡単に短いフレーズを積み重ねてできあがる音楽とは!? それができあがった時の響きに生徒たちは新鮮な驚きと喜びを感じていた。

上垣内寿光氏との共演では間近で本物のギターソロを聴き、そのアーティストと共演することによって、全身でその音楽を感じ、ただ聴くだけとは違う大きな刺激を受けることができた。

さらに今年度は鶴学園創立50周年記念祭典で共演させていただいた作曲家、加藤健一氏に依頼し、本校オーケストラのために新曲を書き下ろして頂いた。これは、伝統的なオーケストラとしての「響き」をつくっていくと同時に、本校オーケストラにしかできない「何か」を追求していきたいと考えたからである。そのため、楽器編成には古典的なオーケストラにはないサクソ、ユーフォニウム、ギターを含め、現メンバーに琴、和太鼓を演奏できる生徒がいるので、その楽器を含めた和と洋の競演という形をとった。

参考演奏や前例が何もない、真っ白な状態から作品を作曲家と共につくっていくという作業、これもまた生徒にとって非常に刺激的な作業であった。

—以下は生徒の感想である。

ディエゴ氏、ウリ氏との共演について

・単純なリズムなのにみんなが重なって一

つの音楽になる。その日のそのメンバーにしかできない音楽になった。

- ・みんなの音を聴いて次のリズムに行く。言葉が通じなくても音楽で通じ合える感じ。
- ・(指揮のディエゴ氏と)目を合わせると楽しくなった。どういう演奏をすればよいのか伝わってきた。自由に演奏できたとしても合わせやすかった。
- ・楽譜のままじゃなく自由に演奏した。これが音楽かなと思った。
- ・不協和音がたくさんあったけど形になっている。今までにない音楽だった。

上垣内寿光氏との共演について

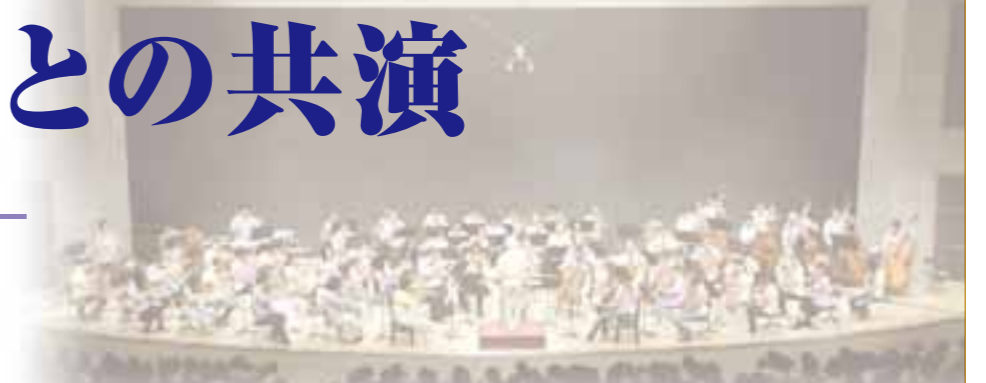
- ・プロの演奏を目の当たりにし、その演奏技術に裏打ちされた表現力の広さに驚いた!そして常に全力で音楽と向き合っていた。リハーサルも本番も感動した。あんな風になりたい!
- ・弾いてないときも音楽を感じた。音楽になっていた。その雰囲気にもみんな引き込まれていた。

加藤健一氏との活動について

- ・作曲家と作っていくのは初めてだったけどいい経験になった。自分のパートについても直接聞くことができた。作曲家は(曲に対して)はっきりした意志を持っているとわかり、演奏する時プレッシャーにもなったけど、作曲家の意図を表現しようとした。
- ・作曲家に直接指導してもらったのは初めての経験。それは言葉にできないくらいの経験だった。

—以上、生徒の気付きより

今回のコンサートは最先端の音楽に挑戦したり、全く新しい楽曲を作曲家の指導の下に作品という形にしていくなど、極めて挑戦的、実験的なコンサートであった。



アフィニス祝祭管弦楽団に混じって演奏

本校の教育方針である、国際性を育て、創造力を錬磨し、それを発信していく、ということは今回のコンサートの本番のみならず、全て英語で行われたアーティストたちとのリハーサルを体験するなかでもしっかりと具現化できたのではないだろうか。

アフィニス夏の音楽祭2011

サマーコンサートに続き、8月26日から28日にかけて広島市未来都市創造財団からオファーのあった「アフィニス夏の音楽祭2011広島」に参加した。そこでは世界的な指揮者、秋山和慶氏の指揮クリニックのモデルオーケストラとして、また、「あいうえ音楽教室」では世界から招聘されたアーティストたちと共に小学生に楽器体験講師として、そして広島交響楽団員を含むアフィニス祝祭管弦楽団の一員として、本校代表メンバーがコンサートに出演した。



アフィニス祝祭管弦楽団との演奏終了後、インタビューを受ける

世界から招聘されたアーティストに混じって楽器体験「あいうえ音楽教室」に講師として参加

であったに違いない。ドイツ、アメリカを初め様々な場所で活躍されている方々と直接ふれあい、その演奏に間近で接したことは、そのアーティストたちが継承している長い西洋音楽の歴史に触れ、そのDNAを受け継ぐような体験であったといっても過言ではないくらいである。

—以下は生徒の感想である。

・秋山先生のオーラはとにかくすごかった。圧倒された。指示されてからの音の変わりようがすごかった。とにかく自分が吸収したことは半端でなくくらいあると思う。特に、あいうえ音楽教室(プロとの合同演奏)リハの時だけでも圧倒されて泣きそうだったのに本番は本当にすごかった。迫力や情熱が私たちにも伝わってきて、とにかくついていくのに必死だった。今まで自分ではかなり表現力をつけたつもりだったけど、いざプロの方々と一緒に演奏すると、やはりまだまだと痛感させられた。特にウェン・シン・ヤンさんやケッセルさんの、音一つ一つをムダにしない音楽に対する姿勢など、たくさん魅力を持っていて早くそんな演奏ができるようになりたいと思った。一緒に弾かせてもらって身震いがするほど感動した!音楽はやっぱり人に感動を与えられるすごいものだなあ、と改めて感じた。

—以上、生徒の気付きより

この夏体験したことは「なぎさオーケストラ」に大きな影響を及ぼした。その成果は、第35回高等学校総合文化祭最優秀団体に選出、来年度の「全国高等学校総合文化祭とやま2012」への出場決定、また、「平成23年度全国高等学校合奏コンクール」広島県大会で最優秀賞受賞、中国大会で優秀賞受賞に結実した。



第1回サマーコンサートにてディエゴ・ヤスカレーヴィチ氏と共に



第1回サマーコンサートにてウリ・ゲッテ氏と共に